

『地域にひらかれた、みんなにやさしい病院』出発です

岐阜勤労者医療協会理事長 みどり病院長 松井 一樹

屋根にソーラーパネルを設置



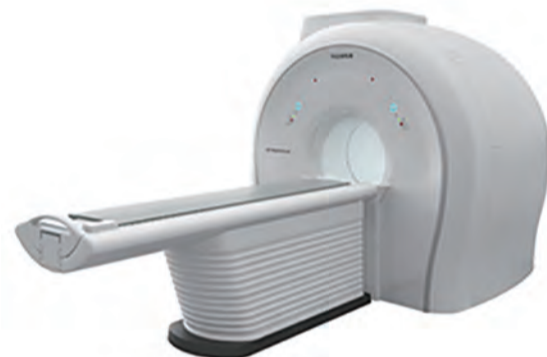
そして医療機器の目玉は、1.5T（テスラ）磁力の大きさをあらわす単位）のMRIを導入したことです。全国の

新病院の建物の特徴は、いろいろありますが、なんと「ZEB Ready（ゼブレディ）」という50%以上の一次エネルギー消費量の削減を実現した建物であることです。

現病院が開院した、1989年3月には、まさか35年後に建て替えの時に再びやって来るとは、その当時、若かりし私は、予想していませんでした。



骨密度測定装置(DEXA)
※イメージ図



新MRI装置 ※イメージ図

の民医連の同規模の病院で、ここまですべてのMRIを持っていない病院は多くはありません。この地域における病院のありかたを検討した結果の設置となりました。

また、骨密度測定器も、診断ガイドラインに沿った機器を購入していきます。これらを積極的に活用していきます。

病院アメニティに関しましては、皆様の叡智を集結し、新しく、気持ちよい病院になりました。

最後に、病院のコンセプトである『地域に開かれた、みんなにやさしい病院』に集い、訪れた方々が、幸せに満たされた変化が起きますよう日々医療活動を進めてまいります。

引き続き、病院の活動、岐阜勤労者医療基金へのご協力よろしくお願ひ申し上げます。

待ち望んだ新みどり病院が開院します

岐阜健康友の会会長 大塚 研二

2020年に建設計画を始めた新みどり病院が今年2024年5月に開院し、診療を始めます。新病院は、「すべての住民が利用しやすい病院に」「安心してかかることのできる私たちの病院に」の願いに込める病院を目指しています。職員、友の会会員、地域の皆さんの共同の力が建設運動を推し進め、開院を迎えることができました。

【タイルアートの除幕式】

3月15日に、新病院の玄関入口に飾るタイルアートの除幕式を行いました。「建設運動推進委員会」の選考会で、74名、95作品の応募の中から選ばれたのが「鮎の遡上」です。作者の瀬瀬宏也さんは、「新しいみどり病院と岐阜勤労者医療協会の未来を清流を遡る鮎に重ねました。」と語っています。このタイルアートは、新みどり病院完成を期して、職員と岐阜健康友の会が岐阜県特産の多治見のタイルを使い作成し、一つ一つのタイルを組み完成させるのに数百人が参加しました。来院の際には是非ご覧ください。

【内覧会】

4月14日に開いた新病院の内覧会に多くの方々に参加していただきました。広く呼びかけ、誘い合わせてご参加いただいた皆さん、ありがとうございます。ご利用しやすい病院になっているので、ぜひ「過ごしやす

病室になったでしょうか。「予想や期待と比べてみると思うところは。」「玄関のタイルアートにも注目が集まったでしょうか。参加者の皆さんに伺った感想、ご意見などをこからの病院の運営などに反映されるようにしていきたいと思っております。診察を受けてからのご意見などもお聞かせください。

【勤医協基金の目標達成にご協力ください】

多くの皆様の暖かく力強いご協力のおかげで、2024年度までの基金目標の2億円達成までに7500万円となっています。（2月末現在）新みどり病院の説明会を継続し、来年2025年初頭に始める歯科外来の説明会（19回になります）を広げ、基金の呼びかけを続けましょう。楽しく輪を広げる友の会の活動を進め、会員と「いつでも元気」の読者を増やしながら、新病院建設に向けた勤医協基金の目標達成への協力を訴えましょう。



健康 春秋

沖縄で全日本民医連の定期総会が二月に開かれ、オプザバーとして参加しました。また、オプシオン企画の平和学習フィールドワークにも参加。引率・解説は沖縄民医連の職員で、那覇市の県庁前から出発し、隣接する普天間飛行場のある浦添市を通り、帰路は海岸沿いに那覇空港までの行程▼普天間を見下ろす高台のある嘉数地区では、沖縄戦で激しい闘いがあり、一家全滅が三割を超え、住民の半数が亡くなりました。弾痕など激しい闘いの痕跡が残っていました。この公民館前に細長いボンベが設置されていました。集落の連絡用に使われていたが、後になつて、米軍兵士から婦女子を守るための「警鐘」として使われていたといわれています▼さて高台からの普天間飛行場には、オスプレイの機体を数台確認しました。二〇〇三年十一月、上空から視察したラムズフェルド米国防長官が、「こんな危険な飛行場は早く閉鎖しろ」と発言したにも関わらず日本政府は存続を訴えたという事。もしそのまま返還されていたら、辺野古問題は起きなかつたかも知れません▼帰路、那覇軍港の移設予定の美しい海岸沿いを走りました。こちらは、国、県、那覇市、浦添市で基本合意されていますが、美しい海岸を破壊することへの反対の声も徐々に広がっているというところでした▼沖縄施政権返還の一九七二年前後に書かれた大江健三郎の「沖縄ノート」を読んで参加したのですが、日程上辺野古まで行けず、まだまだ学び、知ることの必要性を感じた沖縄体験でした。（K）